

られる。このように「中」の意味するところをめぐって微妙であるが、一般には後者に解しているようで、大系本の注や河北騰氏の「栄花物語大鏡に見える中関白家」に於ても道長を含めて解されている。

18、この称呼の始められた時期については、今まで先学の御研究は無く、土田直鎮氏も「国文学」四十二年六月号において「いい出された時期については調べていない」由を記しておられる。この問題は、自撰馬内侍集の最後の成立年代とかゝわりを持つものとして興味を持っていたので、多々問題が残るが、敢えて考察を試みた次第である。

〔受理一九七三、一〇、一一〕

なお、『かげろふの日記』中巻に

中関白殿の兵えのすけと申けるとかなやなめりとおもへば、大夫よびいだして云々

との文意のややおかしい一文がある。問題はここに記された「中関白殿」の呼称であるが、この日記文当時（天禄二年八九七一〇）道隆は十九才、兵衛佐であった。また『かげろふの日記』の成立年代（天禄三年八九七二〇）貞元年八九七六の間から考えてみても、その成立は道隆の少将時代、二十四才頃までのことであった。従ってとうてい「中関白殿」の語が本文中に記されることは無かつたはずである。

仍って、「中関白殿と申けるとかや」の部分は傍注が本文にまぎれこんだもので、もとは「兵えのすけなめり」とあったものであろう、とさ

れる諸先学の説にしたがい、本稿の諸文献における『中関白』の記述例の中には数えない立場をとったことを付記しておきたい。

と、「すっかりおちぶれて」の意に解したものと両説あり、馬内侍の場合も両用に解されるのではあるが。

7、家集所収歌の中、五三・七七・七八・一四二番の四首

8、「紫式部とその周辺資料」一六九頁〔源氏物語講座〕内〔有精堂〕所収

9、家集六詞書「左大将ひさしくをともしたまはて」

続後撰集^{九〇}「久しく音せざりける人につかはしける」法成寺入道前撰
政太政大臣

10、新古今集一〇四五には「法成寺入道前撰政太政大臣」とある（イ本
法性寺）。鈴木一雄氏は、「馬内侍―その生涯を中心に―」（『国
文学』昭和三十四年三月号）に於て「法性寺」の本文を用いられ、

その表記について「法性寺入道前撰政太政大臣は忠通。法成寺の
誤りならん」と述べておられる。

11、馬内侍の生年については、竹鼻續氏は「天曆八、九年出生説をとられ、

鈴木一雄氏はもう二、三年早い出生とみられる。

12、馬内侍の南なる家に十二月二十日ばかりにわたるまつどもにつけて

春近き隣に君は住の江のまつ人とはたおもほゆる哉

返り

冬ごもり水にとちて水掻の春の隣にとくやとぞ思ふ

13、父おとゞの御服にてもものし給ふに内より馬内侍を御使にてとはせ給

へるにその夜とゞめてあかつきに

争でかは夢にも人のみえつらむ物思初し後はねなくに

返り

馬内侍集成立期に関する試論

歎きつゝ我もねなくにみゆる夢の慰む方はなきと社きけ

14、「人文論究」（昭和三十五年六月号）

15、呼び名の定着に関連があるの参考までに引かせていただく。

「藤原道長の日記の諸本について」（『日本学士院紀要第八巻二号』）阿部
秋生博士の御論考の中の、抄出本について論ぜられたところに頼道が
「故殿」から「宇治殿」の称呼に固定するまでの事に少しふれられたと
ころがある。即ち部分的に抜き出せば「頼道の薨じた延久六年二月二日
の後、「宇治殿」という称呼が固定するまでの間、おそくとも師実の薨
じた康和三年^{（一〇〇）}以前の抄出であることは認めなければならない^{云々}。」とあ
る。その没後の称呼が定着するまでに年数を要していることをうかがう
に足る一例であろう。

16、池田亀鑑博士説。

17、「中関白」の意味づけについては、「解釈」第十二巻九号、第十四巻一
号に芥唯雄氏の、同じく第十三巻二号に慶野正次氏の御考察がある。芥
氏は、今鏡「ふじなみ」の近江基実についての記述を引かれ、中の摂政
が父忠通と次弟基房の中間の意であることから、道長が正式に関白に任
ぜられていないことの理由と相俟って、「中関白」も父兼家と次弟道兼
の中間の関白の意とされる。これに対して、慶野氏は、大鏡の記事が、
公卿補任の道長の条、長徳元年五月十一日条の記事と一致する旨を述べ
られ、実質上関白補佐の詔書にも匹敵するものであること及び、「ナ
カ」の解釈にふれて、源氏物語・更級日記・落窪物語の例を上げ、二番
目の意と説明される。従って道長迄の四人の中の二番目の意といってお

『大鏡』 第五卷には、

このいまの入道殿（中略）五月十一日に関白の宣旨うけ給はりたまうて

（古典大系 二〇一頁）

と。また

たゞし殿の御まへは卅より関白[・]せさせたまひて一条院、三条院の御時、よをまつりごち、わが御ままにおはしまし、に、又当代の九才にてくらゐにつかせ給にしかば、御とし五十一にて摂政せさせ給とし

（古典大系 二二三頁）

等々。

これらは、年代的にや、後の記述であり、書物の性格上からも信憑度には問題のある点も無しとはしないが、こうした資料の伝えるところ、道長の権勢は実質的に関白の詔を必要としない程のものであったことを物語るものであろう。言い換えれば、こうした資料の伝えるところは、又当代に於ける世人の道長を関白と仰ぎ見た認識の一裏付ともなるものではないであろうか。

道長の政権は執政のはじめから内覧であり、並ぶものなき力を持ったが、その政権も実質的におちつき、動がぬものを築きそめるころ、質の伴わなかった七日関白の道兼は、重視の必要は無いとしても、道長を含めた兼家父子の関白の二番目の関白の意味に於て、その道長政権の直前に五年間に亘って続いた道隆政権への称号としての「中関白」^{（注18）}なる名が、世の人々の口へのぼり、定着していったものではなかったろうか。

とすれば、それはおよそ道長の全盛期ともいうべき、寛弘末年から長和（寛仁の間、馬内侍の六十才台のことであつたろうか。少くとも文献的にはそう考えざるをえないのであり、馬内侍集の最終的成立もその間の事と推定される。

それは、前述の家集中の「おとろへはて、うち院にすむに」の詞書にも矛盾しないのである。

注

1、拙稿「馬内侍集における編纂意識の特徴についての一考察」（『語文研究』二十九号・『校本馬内侍集と総索引』（笠間書院）所収）

2、記録や『大鏡』などのほか、私家集では、「小大君集」に

「正暦五年のほどはいみじう人しぬそのころもくのくら人のさとより
おきもあえずはかなきつゆをいかにしてつらぬきとめんたまのおもが
な」などの贈答歌があるのもその一例である。

3、「人文論究」（昭和三十五年六月号）

4、前掲拙稿五八頁、六〇頁参照

5、歌番号は、三手文庫蔵 契沖自筆本所収歌に通し番号を付したものである。

6、源氏物語「濡標」の巻の「こよなくおとろへたる宮仕へ人などの、いはほの中たづぬるが落ちとまれるなどこそあれ」の「こよなくおとろへたる」の解釈は、古・新注共に「すっかり老い杯ちて」の意に解したものの

右のように記される。

傍線部に「内覧」と記されず「関白」とあるところに注目すべきである。

『栄花物語』などでは、内覧を広義に解して「関白」と記しているが、それらの記述例については後に述べる。

道長は、長徳元年五月十一日内覧の宣旨を蒙った。

『公卿補任』に言う。

五月十一日宣旨。官中雑事先触権大納言道長可奉行者。
と。この日の『小右記』には、

丙辰、大納言道長卿蒙関白詔之由、仍取案内、頭弁示送云、非関白詔、官中雑事、淮堀川大臣例、可行也者

とあり、実資のもとに関白の詔と誤って伝った旨を知る。

それでは、参考までに道長の内覧が広義に解されている記述をあげてみよう。とりもなおさず、実質的には関白の実権を握っていたことの傍証となると思われるからである。

『一代要記』一条天皇時代「関白」の項

内覧

大納言道長 兼家五男右大臣左大将長徳元年五月十一日丙辰宣旨宮

中雑事先触権大納言道長可令奏行者年三十 (略)

また、同三条天皇時代「関白」の項

左大臣道長 寛弘八年六月十三日乙卯帝受禅日関白如旧

一条帝時代に引きつゞき三条帝の受禅後も関白としての実権をもっていた事を物語る。

また『扶桑略記』には次の如き記述がある。

○長徳五年(長保元)十一月朔日庚辰。関白道長一女彰子入内。七日爲女御。年十二才。

○長和元年(寛弘九年)壬子二月十四日。立女御藤原妍子爲中宮。年十八才。関白左大臣道長二女。

○長和三年四月九日。行幸関白左大臣(道長)枇杷第。

(寛弘六年十月十四日、同十六日、五年九月十一日 等省略す)
長保元年から長和三年の間に「関白」が使われている。

『栄花物語』「見はてぬ夢」には

この粟田殿の御事の後より、五月十一日にぞ、左大将天下及び百官執行という宣旨下りて、今は関白殿と聞えさせて、又並ぶ人なき御有様なり。

(古典大系上 一五二頁)

と。また

山の井の大納言日頃わづらひて、六月十一日にうせ給ぬ。(中略)

今の関白殿も、この君をば故殿の子にせさせ給ひしかば

(同 一五二頁)

今の関白殿の御女あまたおはすめれど、まだいと稚くて走りありき給程なれば

(同 一五五頁)

などとあり、明らかに関白と意識しての表現である。

その他、『公卿補任』『尊卑分脈』『一代要記』『二中歴』『大鏡』『今鏡』『江談抄』『袋草紙』『古事談』『十訓抄』『古今著聞集』等々以下時代が下るので省略するが、これらの文献には例外なく「中関白」の表記を見出すことが出来る。

『公卿補任』や『一代要記』『尊卑分脈』等における記載事項は、後々種々の記録類によって補記されたものが多く、最も信憑度の高い『公卿補任』にしても、早く朱雀朝（九三一―九四六）にすでに成立していて、次々に書き継がれては来たものの、最終的に編纂される江戸時代までの、どの時点に於て「号中関白」が記入されたものであるかははっきりがたい。『一代要記』にしても同様であろう。従って資料としては二次的なものと考えねばなるまい。また前述の流布本『赤染衛門集』が、万寿二年頃から長元のはじめにかけての間に成立したとする定説に従えば、その頃すでに一般的な道隆の呼称となっていたことを示すもので、『大鏡』以下における「中関白」の記載は、けだし当然といふべきであろう。なおついでながら赤染衛門がしばしば作者に擬せられる『栄花物語』には、この称の記載は無い。これは、『大鏡』が「今年万寿二年乙丑の年」現在で話をしているのに対して、『栄花物語』は、物語のその時その時現在で語ってゆく物語の手法の相違によるためであろうか。

以上見たかぎりでは、『馬内侍集』における「中関白」の語の記載が最も早い例のように思われる。

「中関白」の意味づけについても「中」の意味するところをめぐって、兼家父子の関白に道長が含まれるか否か、微妙な論議を呼んでい

る。が、後代「御堂関白」と呼ばれる道長は、内覧の宣旨は蒙ったが、正式には遂に関白としての任に就くことは無かった。

『中外抄』の藤原頼長とその父忠実、及び中原師元との「内覧」と「関白」の相違に関する問答は、公卿社会に於ける通念としては、二者が別個のものであることについて論議したものである。しかし、その内容が誠に似通っていることを意味して興をそゝる。その問答を次にあげる。

（久安四年八月二十四日、二十五日条）

又仰云。内覧人與関白有何差別哉。予申云。内覧ハ宣旨也。太政官所申文先可触其人由也。関白ハ詔也。巨細難事関白其人雖別無差別歟。仰云。御堂ナトハ内覧之時只如関白。我依不室車問入殿。仰云。不分明也。但案スルハ不可一同也。内覧ハ官中所申文許を可計申也。細書ニ申ス文ハ不知也。又巨細も非太政官可申ハ不可知也。関白ハ巨細可関白ト有説。仍自諸司申上文。皆可見皆可沙汰也。

（『続群書類従』卷第三百九）

つまるところこの二者は、「詔」と「宣旨」との相違が決定的な相違であろうが、内覧といえども道長に於ては、実質的に関白同様の実権を握ったことは事実であった。現に『公卿補任』寛仁三年の道長出家の項には、その没後書き加えられたとみられる出家後の経緯の最後に、

（万寿四年）十二月四日、遂以薨、年六十二、在官関白・摂政
二十三年（長徳元後長和六年前）

（傍線筆者）

か」とされ、私見では、もう少し後の道隆没後のことではなかったかと思えていることは前章で述べた。以下、「中関白」の語について、現存文献からもう少し詳しく考察してみたいと思う。

『馬内侍集』の中では、次の二箇所に用いられている。

人かたらふときゝたまひて中関白

103 あやしきはぬれぬ人なきそめ川のかゝらぬ袖もくちはてぬへし

中関白殿をはせむとのたまてまへわたりたち花のかきりおら

せてすき給ぬれは

111 こち風(マ)にこのみしるくてたち花のためしことのすきぬめるかな

現存諸本の本文には異同なく、文意からみても本来のものと見て良いであろう。とすれば、馬内侍集が自撰とみられるかぎり、馬内侍自身の手によって、当時すでに呼ばれていた「中関白」の呼び名が記されたということになる。

次に、諸文献に表れる「中関白」の語を調べてみると、次の如き結果を得る。すなわち、『小右記』『権記』『御堂関白記』等の当代の漢文日記類には、その称呼を見出すことは出来ない。たとえば、『権記』長保二年十二月十六日の条、定子崩御に際しては、

皇后諱定子、前関白正二位藤原朝臣長女

と記され、「前関白」と呼ばれている。長保二年は道隆没後六年に当る。「前」は、すでに道長の権勢を現関白同然にみた意識から出た言い

方でもあらうか。

また、中関白家の正暦の春を讃えた『枕草子』にも関白道隆を「唯今の関白殿」「時の関白殿」又は単に「関白殿」と表現されていて、「中関白」の称は全く用いられていない。「長保三年八月頃までの間にすべて集成され、巻末に作者による跋文が付せられた」とみられている『枕草子』に、もし「中関白」が、道隆関白在任当時からと呼称であったとすれば、回想録ながらその時現在の書き方になっている『枕草子』のどこかにその名が記されることも可能であったに相違ない。しかし、この呼称について全くふれられるところが無いということは、やはり没後の呼称であったことを暗示するものであり、長徳元年に道隆・道兼が他界し、その後すぐに言い出されたものでは無かったとみられる。それはつまり、道隆に関する記事は極めて少いのであるが、『御堂関白記』に記される「故関白」はさることながら、長保・寛弘の交に『小右記』『権記』などに於て「中関白」の称の表れてなく、前述の如く、『権記』長保二年の記事に於ても「前関白」であることは、この呼称がいまだ定着していなかったことを暗示しているとも見られるのではないであろうか。

私家集では、馬内侍集を除いては赤染衛門自撰といわれる流布本『赤染衛門集』にその呼称がみえる。しかし、それ以外の同時代の私家集には見出すことが出来ない。

勅撰和歌集では、応徳三年奏覧の後拾遺和歌集に見えるのが最初である。

の如く、馬内侍にはむしろ右大臣としての道兼の方が親しみがもてたのであろう。が、というよりもむしろ現右大臣との区別を表す「粟田」を冠して呼ばれるこの称が、家集編纂当時は一般に固定化していたと見る方がよいのかも知れぬ。おそらく七日関白の道兼は、関白として世間に認められていなかった事を意味するものであろう。

『権記』長保二年七月二十六日の条には

詣内府、覽相撲（依左大将召方相撲也）密々五番、故粟田・承相・於別業覽之、非無先

例

の記事がみられる。「故粟田・承相」であって「関白」では無い。長保二年は道兼没後六年目に当る。行成の意識に於ても「大臣」でしかなかったのである。

また、『御堂関白記』長和元年三月二十六日の条に

典侍藤原 卒、從昨日有惱氣、今日申時々、是二条右大臣落子也とあることも参考になろう。道兼没後十七年のことである。

しかし、あるいは、馬内侍が家集編纂当時にはその「七日関白」の称が、¹⁴「さがない京童の間には広まっていたことであろうが、親しかった道兼の思い出を記すにあたって、この忌わしい名を避けたのも又当然のことであつたろう。

「中関白」については、詳しくは次章で述べるが、編纂当時、故人道隆に対する「中関白」どの称呼がすでに定着していたために諡名に代るこの通称が記しとどめられたものと考えられる。

以上、簡略ながら、家集に登場する主な人物の呼び名について見てき

たが、結果的には呼び方の時点が必ずしも一定しているわけではない。左大将や君達としての公任・実方・また他の実名をもって記された人々については、家集編纂者馬内侍の意識に生きている、交流当時の呼び方のまゝであり、謙徳公・中関白・粟田右大臣については、編纂当時点での一般的呼称を用いていると云うことが出来よう。

本位田氏は「左大将」を道長とみられるので、按察使大納言（朝光か）・中関白・粟田右大殿についての呼び名を「正暦末年頃のもの」としての考証をされ、

これらの呼び名の考証が許されるなら執筆時期を示すものであろう。¹⁵と述べておられる。

しかし、今述べて来たごとく「中関白」という呼び方は、正暦末年頃の道隆生前の称呼ではなく、その没後のもの、むしろ、入道関白に対することは勿論、道兼の七日関白、あるいは、道長の関白同然の権勢に対する意味で生まれ、人々の間に定着して行った呼び名であったと私は考えるのである。¹⁵

五、

「中関白」という称号は果して何時頃から出たものであろうか。

こうした呼び名の発生期を探ることは、資料面で困難な事が多いであろう。しかし、もし解明できるとすれば、それは編纂執筆時推定の好資料となることは云うまでもない。本位田氏はそれが「正暦末年頃のもの

中関白について述べる前に、馬内侍集に於ける主な人物の呼び方について検討しておきたい。一見したところ、実名あり、官職名あり、諡名ありで、必ずしも一貫した秩序をもたないかの如くである。

実名で記されているのは、公任の君、實方の君、すけゆき（藤原相如）、あきのぶ（高階明順）、やすのぶ（藤原保信カ）らである。早く故人となった一条摂政伊尹は、「謙徳公」との諡名で記されている。また、恋愛関係にあった朝光には「左大将」。道兼には「粟田右大殿」。道隆には「中関白」をもって記している。このうち、「左大将」「粟田右大殿」は共に極官ではない。前者については、「左大将」が朝光か、道長か、との二説がある。それは、家集六番の歌が『続後撰集』『秋風集』に道長の作となっていること、及び家集八二番の歌が、『新古今集』に於て「法成寺入道前摂政太政大臣」（イ本 法性寺）となっていること、また、二人の経歴が共に兵衛佐・左大将を経ており、又共に馬内侍とは恋愛関係にあった理由による。

しかし、新古今集・続後撰集に於ける入集歌を道長作とする点については、勅撰歌集とはいえ、成立年代からいって当時から遙かに後代の編纂になる故に、それぞれの集の撰者の解釈の反映によるために生じた問題であって、必ずしも信憑性は高くないのではないかと考えている。又、一方道長の経歴からみれば、道長の左大将時代は、長徳元年四月二十三日、左大将済時が大将を辞し、同日薨じたため、二十七日、道長が左近大将を兼ねることとなったもので、その任期は、翌二年八月九日までの約一年三ヶ月余の間であった。しかし、その間に、道長は、長徳元

年六月十九日には右大臣に、翌二年七月二十四日には左大臣に昇進。左大将のみの官にあったのは、長徳元年四月二十七日から六月十九日に至る、わずかに五十余日間であった。従って、その呼び名も「左大将殿」と呼ばれ定着する間もなく「右大臣殿」と呼ばれることとなったはずである。更に、馬内侍との年令差から考えてみると、馬内侍が天曆五年生まれとみなして、道長より十五才もの年長であり、一時的な恋愛関係のあったことは確かであるが、家集に「左大将」として、しばしば登場する主たる恋愛の相手とみることは首肯しかねる。これに対して閑院朝光は、二十九才から三十九才に至る青年期を左大将として過した。馬内侍とは同年輩で、彼の家集にも二人の交際を裏付ける贈答がある。そしてまた、貞元二年十一月八日、朝光の父兼道公の薨去に際しては、内裏からの御使いとして馬内侍が遣わされており、その時の贈答も二人の親密な関係を物語っている。又、さらに当時、馬内侍が中宮皇子のもとに出仕していた事も、皇子が朝光の異母姉であった関係によるものとみられる。——こうした理由から、「左大将」を朝光とみるのであるが、極官の「権大納言」を記さず「左大将」と呼んでいることは、交際当時の思い出にまつわる呼び名を、その文反古やメモに記されたまゝに書きとどめたものではなかったかと思う。

道兼の右大臣在任期間は、正暦五年八月二十八日から、兄道隆の薨去によって、長徳元年四月二十七日、関白となるまでの約八ヶ月間であった。が、極官の関白が僅かに十二日間、慶賀を奏して七日目に薨じるといふ、実のともなわぬ「世云七日関白」であったため、本位田氏の御説

たるふるまいぞ、見しるまじき人のうえなれど、あはれに思ひよそへらるゝことおほく侍る。

（古典大系 四八三頁）

去年まで舞の上手の名にふさわしく舞った兼時が、今年はそのものの腰がすっかり老衰してしまったというのであり、翌寛弘六年十一月二十二日の『御堂関白記』には、

二十二日癸酉、雪下、臨時祭如常、一舞忠経・定頼、依無拍打者、召老近将監兼時（侍）候（侍）倍（侍）從中、打拍見物、宿所（侍）儲食、侍御神樂間、於宿所殿上人、上達部等有食物。子時参来、御神遊間候、召人召立兼時令舞、非如本人々在哀憐氣、本是人長上手、依病重年老不奉仕

と、これを裏付ける記事を見出す。兼時は『枕草子』二四五段に「すけたゞは木工の允にてぞ蔵人にはなりたる（中略）尾張の兼時がむすめの腹なりけり」と記される藤原輔尹の祖父。増淵勝一（生⁸）氏の推定によれば、輔尹の出生は「ほゞ天曆・天徳（九五六―七）の交前後」とある。従って寛弘五、六年の頃には五十二、三才になっていたはずで、その母方の祖父である兼時は、八十才を過ぎる頃でもあったろうか。『紫式部日記』の「こよなくおとろへたるふるまひ」が相当な老令を意味していることが知られる。

また、『更級日記』に「老い衰へて」の二例をみる。

人の上にても見しに、老い衰へて世に出で交らひしは、おこがましく見えしかば

（古典大系 五〇九頁）

ひくらし父の老い衰へて我を子としも頼もしまらむかけのやうに思たのみ

（古典大系 五一頁）

前者の「老い衰へて世に出で」た時期が、同日記文中の「親からうじてはるかにとをきあづまになりて」にあたり、定家自筆本の注記や巻末の勘物によって、それが長元五年二月八日常陸介に任ぜられた、孝標六十才の折の事であったことが知られている。また後の例は、帰京後の様子を記したもので、孝標六十四才の時のことである。

以上、煩瑣ながら、男性に於ける「おとろふ」の年令のわかる用例を引いてみたのであるが、こうした用例を通して、五十才頃までは確実に宮廷に仕えていた、そしてそれ以後も宮廷に残った可能性のある馬内侍が、自ら綴った「おとろへはてゝ云々」の詞書のもつ意味、寺院住みにおちぶれた老の程もほゞ推量することが出来るのではなからうか。

若き日には、多くの貴紳たちにもてはやされ、容色豊かな女性であつたらしい馬内侍が、宮廷を退き容色・氣力のおとろへも今や極限になんなんとする老の現実と直面しての実感綴ったものとみられ、年令的にはやはり五十代後半から六十代のころのことではなかったかと考える所以である。

四、

「中関白」とは、言うまでもなく関白藤原道隆の呼称である。

をきゝて

206 後拾とゝまらぬ心そ見えむ

かへる雁花のさかりを

人にかたるな

(三手文庫本)

右の如くであり、家集の詞書の方が、より具体的な表現である。こうした詞書の在り方からしても、家集のものを簡略にして勅撰集に入れたと考えることは可能であるが、その逆は到底考えられない。やはり本来家集中にあったものと見るべきであろう。

さて、この歌の詠まれた時期については、内侍がすでに宮廷を辞して、宇治院にその身を寄せるころ、すなわち隠棲生活に入ってから後の詠作であることが、その詞書から明らかである。現存する馬内侍の歌の中では、その生涯の最も老年に達してから詠ともいうべきで、おそらく家集の最終的成立に最も近い時点を暗示するものとみられる。

「おとろへはてゝ」の語感からは、いかにも老い果てた心身を思わせるものがあるが、馬内侍のここに至る経緯として、若き日のことはさめておき、(注6)少くとも次のことは考慮すべき必要があるろう。すなわち馬内侍は、「馬内侍歌日記」の別名をもつ『大齋院前御集』に登場する「馬」と同一人物であり、家集所収歌に四首の重なりのあることは、すでに周知のことであるが、その後、中古三十六歌仙伝に云う一条皇后宮女房、また『如意宝集』に「中宮内侍むま」、拾遺抄、拾遺集に「中宮内侍」とある如く正暦元年十月五日、定子の中宮冊立に際して掌侍となり、皇

馬内侍集成立期に関する試論

70 とゝまらぬ心ぞ見え

む帰る雁花のさかり

を人にかたるな

(国歌大観)

后崩御の、長保二年十二月十六日までは、少くとも定子の後宮に出仕していたと考えられる。そしてその年令は、出生を私見では天曆五年頃と推定するので、定子崩御の時にはすでに五十才には達していたのである。又、定子崩御後ただちに宇治院に身を寄せ隠棲する身となったか、否かの問題についても必ずしも定かでは無い。後々、『悦目抄』『八雲御抄』『十訓抄』等において、紫式部・和泉式部・赤染衛門・伊勢大輔らと共に歌人として並び称せられたり、又、梨壺の五歌仙などと称されていることや道長と親しかったこと、などからすれば猶しばらくは宮廷に留まり、彰子のもとに出仕したか、と考える可能性も必ずしも無しとは言えない。とすれば、寺院住みは更に年令の進んでからの事となるであろう。いずれにせよ、定子崩御の頃にはすでに馬内侍は、当時としては老の意識を十分にもっている年令に達していた。こうしてみれば、この詞書も自らうなづけるのである。たとえ「おちぶれはてゝ」の意と解しても、この場合年令を抜きにして考えることは不可能であろう。

さて、仮りに身心の衰弱の意味にとったとして、「おとろへはつ」とは、年令的に如何ほどであつたろうか。それは勿論、個人差もあり、男女差も当然考えられるが、これについて女性に適切な用例が見出せない。従つてこゝで引くに適切でないくらいはまぬがれぬが参考までに一応男性の例をあげてみることにする。

『紫式部日記』寛弘五年十一月二十八日、賀茂臨時祭の条に次の一文がある。

兼時が、去年まではいとつきづきしげなりしを、こよなくおとろへ

人。至于七月^二 漸散。

『馬内侍集』に名をとどめる権門貴紳たちのうち、『百練鈔』の記事にもみる如く、馬内侍と特に親交のあった大納言朝光が、長徳元年三月二十日、四十五才で薨じた。次いで四月十日には関白道隆が、これは流行病では無かったが、四十三才で薨じ、続いて五月八日、三十五才の道兼が、関白の慶賀に参内して僅か七日にして薨じたのであった。

一ヶ月余りのうちに次々におそった、こうした親しい貴公子たちの死の衝撃が、家集編纂志向への端緒をなしたことは否めないであろう。このことについては、早く本位田重美氏も「馬内侍集覚書」の中でおそらく長徳二年の夏からそう遠くないころ、彼女の経てきた多くの貴公子との恋愛遍歴を思い出しながら書き綴った自撰家集で、想像を逞しくすれば、あの疫病の大流行で、かつての愛人であった人々が次々に他界していったことが成立の契機になっているように思われる。と、述べられるところである。

たしかに家集におさめられた歌は、齋院や宮廷を舞台とする安和（九六八～九六九）・天禄の頃から長徳（九九五～九九八）頃までの詠作とおぼしきものが多く、貴公子たちの死が、とり交した文反古を整理し、あるいは自作歌のメモを繙きつつ、故人をしのび、思い出を家集に綴ろうという契機をなしたものであったろう。

三、

家集編纂の契機が、そうしたかつての恋人たちの死にあったとしても、最終的に家集としての纏まりをみたのは何時頃であろうか。

「長徳二年の夏からそう遠くないころ」書き綴ったと本位田重美氏は推定される。が、私は次に記す二点から、その成立時期の推定について、やや異った意見を持つのである。

その一つは、家集二〇六番に前述の「おとろへはて、うち院にすむにかへる雁をきゝて」との詞書を持つ歌のあることであり、いま一つは、やはり家集中の藤原道隆の呼称に「中関白」との称号を用いていることである。前者については、前稿で少しふれたが、改めてこの二つの問題点について考えてみたいと思う。

まず家集二〇六番の歌は、勅撰集からの補入とみられる最末尾の二首をのぞいては、末尾から二首目に位置^{（注）}しており、後拾遺和歌集入集歌でもある。従ってその置かれた位置から、あるいは勅撰和歌集からの補入ではないか、との疑問をも抱かせられるのであるが、後拾遺和歌集（春上、七〇番）におけるこの歌の詞書と、家集二〇六番における詞書とを比較してみると

〈馬内侍集〉

おとろへはてゝうち

院にすむにかへる雁

〈後拾遺和歌集〉

帰雁をよめる

馬内侍集成立期に関する試論

——詞書中の「おとろへはて、うち院にすむに」

「中関白」を手がかりとして——

福井迪子

一、

前に「馬内侍集の編纂意識」について私見を述べたことがあったが、その時、家集中もつとも老年次の詠作とみられる「おとろへはて、うち院にすむにかへる雁をきゝて」の詞書をもつ歌のあることから、家集編纂の時期は、馬内侍が宮廷を退き、静かな隠棲生活に入ってからのもので、およそ六十才を越す頃でもあったろうかとのみふれておいた。

小稿では、この歌の詞書と相俟ってやはり家集中の詞書に記された「中関白」の呼称を手がかりとして、限られた資料で断定的なことは言えないまでも、前の推定がさほど矛盾しないことを述べたい。

二、

正暦四年の秋から長徳のはじめにかけて、鎮西から起り京師に及んだ^(注1) 飽瘡の流行は、大袈・奉幣・読経の努力も空しく蔓延を極め、累累たる死者の山をきずいたことは、種々の記録や『大鏡』などに詳しく、その惨状を窺うことができる。

すなわち『本朝世紀』正暦五年四月二十四日の条に言う。

今日左右看督長等被_レ宣旨。京中路頭構_レ借屋_レ覆_レ庭薦_レ。出_レ置病人。或乘_レ空車。或令_レ人運_レ送_レ藥王寺。云云。然而死亡者多滿_レ路頭。往還過客掩_レ鼻過_レ之。烏犬飽_レ食。骸骨塞_レ巷。

と。また、同五月六日、

去三月以後依_レ疫癘_レ病死之輩不知_レ幾千。雖有種々祈禱_レ似_レ無_レ其応。路頭死人伏骸連々也。

また、『公卿補任』正暦六年の改元記載の注記には、

二月二十二日改為長徳元年（今年所薨納言以上八人。其役十六員）

△傍点筆者、以下同▽

とみえ、『百練鈔』（長徳元年の条）は、さらに詳しく薨じた公卿名を記録し、病勢の貴族社会にまで及んだ凄絶さを伝えている。

五月八日。関白右大臣道兼薨。今日左大臣重信同薨歟。四五月之間。疫疾殊盛。納言已上薨者八人。関白道隆・道兼。左大臣重信。大納言濟時・朝光・道頼。中納言保光・伊勢等也。又四位五位侍臣并六十余